



JA新しいわたでの自己改革

もっと知ろう、JAの取り組み

JA新しいわたでの「農家所得の増大」や「地域の活性化」に向けた取り組みを紹介。今月は、農家手取り最大化の取り組みについて紹介します。

農家手取り最大化の取り組み

JAでは、農業者の所得増大と持続可能な農業生産・農業経営の実現に向け、JA・全農いわたが連携し、平成28年～平成30年までは稲作を主業とする6経営体へ実践メニューを提案し、取り組んできました。令和元年度は新たに2経営体が、経営に合わせた実践メニューに取り組み、所得増大に向け取り組んできました。

実践メニューの内容

1	サポート事業	10	鉄コーティング灌水直播栽培
2	圃場管理システム(Z-GIS)の普及拡大	11	乾田直播栽培
3	買取販売(複数年固定含む)	12	スマート自動給水機の試験導入
4	飼料用米専用品種主食用多収性品種	13	土壌診断に基づく新規BB肥料(水稻・小麦・大豆等)の導入
5	銀河のしずくの栽培	14	(直播等)雑草防除体系の改善
6	園芸産地確立事業導入	15	大型規格農薬の導入
7	園芸品目導入拡大(ういずOne含む)	16	レンタル農機・シェアリース・セルフメンテナンス
8	点滴灌水キットの試験導入	17	ドローンの導入
9	高密度播種苗移植栽培		

生産者の声



株式会社みのり片子沢
代表取締役
根澤 将次 さん

ういずOneを導入し、育苗ハウス6棟でミニトマトを生産しています。夏場、収入を得られる品目で、長期雇用にもつながっています。また、高密度播種苗移植栽培に取り組むことで、労力と経費の削減になっています。圃場管理システム(Z-GIS)で圃場を管理することで、従業員への的確な指示ができ、間違いのない作業につながっています。

生産者の声



農事組合法人サンロード
代表理事
立柳 秀範 さん

飼料用米専用種「たわわっこ」の水稻直播の実証を行いました。出穂の遅れが心配されましたが、おおむね遜色のない収量が得られました。育苗の必要がないためハウスを必要とせず、育苗にかかる経費は削減されました。また、その労力もかからないので、技術はまだ確立されていませんが、今後の可能性を感じています。